

お隣の天使様にいつの間にか
駄目人間にされていた件



Tomodachi no imouto ga
arenidake areni dake **妹**
友達の妹が
俺にだけ
ウザい



♥ GA文庫ラブコメフェア 2021夏 ♥

S級美少女を助けたら
隣の席の幼馴染だった

痴漢されそうになっていた



カノジヨの
妹とキスをした



ただ制服を
着てるだけ



どうか
俺を放って
おいでくれ

なぞが
ぼつと終わった
高校生活を
彼女が愛えようと
してくる





『お隣の天使様にいつの間にか駄目人間にされていた件』

氣付いてほしい乙女心

「……真昼まひるってその格好暑くないの？」

薄手のワンピースにレースのカーディガンを羽織はおりストッキングも身に着けた真昼の姿に、思わず周まわりは問いかけた。

時期は現在八月。夏休みに入ってクーラーの効いた部屋で常時過ごしているとはいえ、ほとんど素肌の見えないその格好は些いささか暑いのではないかと思ってしまう。

恋人いえど不用意に肌を見せないのは周の精神衛生上も助かるが、体調に影響が出るのではないかと心配だった。

真昼は周の声にパチリと瞬まばたきを繰り返した後、小さく笑う。

「そこまで暑くはないのですよ？　どれも生地が薄めですし、冷房が効いているので居続ける
と肌寒く感じるくらいですから」

「あ……女の子の体は冷やしちゃいけないよな、ごめん」

一応、室温が二十七、八度程度になるように空調を設定しているが、エアコンから送られる
空気の設定温度自体はそれより低いので、冷房が直接当たりやすい場所にあるソファでは肌寒
さを感じるのだろう。

女性の体を冷やす訳にもいかなないのでテーブルの上のリモコンを取ろうとしたが、真昼に制

される。

「いえ、私は着込めばいいだけですもの。周くんは脱ぐにも限度がありますから。というか脱がれても困りますし」

「俺は露出狂になった覚えはないぞ……ってそうじゃなくて。体が冷えたら困るから、やつぱり」

「……き、気にしなくてもいいというか、その、ですね」

「その？」

「……ちよつと肌寒い方が、く、くつつけるかな、と思った、というか」

躊躇^{ためら}いがちにもじもじとした様子で真昼が呟^{つぶや}いた言葉に、周は思わず目を丸くしてまじまじと真昼を見てしまう。

真昼はいたたまれなそうに視線を泳がせた後、頬^ほを染めて周から逃げるように目を逸^そらした。

「や、やつぱり周くん的には暑いでしょうし、今のはなかった事に……ひやつ」

あんまりに可愛い発言に、周はつい、真昼の迷惑通りに真昼を抱き寄せる。

真昼の服は冷感素材で出来ているのか、思ったよりも肌に当たった感触はひんやりとしている。真昼自体も、冷房で冷えているのかひんやりとしていて、冷房の温度と真昼のいじらしい願いに気付けなかった事を後悔した。

「……真昼ってやつぱり割と小悪魔みあるよな。くつつくお誘いをしていたと」

「い、言い方に語弊^{ごへい}がありますよ!? ……その、こ、恋人ですので、ちよつとのスキンシップ

くらい、いいでしょう」

腕の中で言いにくそうにもごもごと呟く真昼に、ひっそりと笑う。

「適度な距離を保ってたのに真昼がそれを許してくれない」

「う、だ、だって……周くん、あんまり……触ってくれないですし」

「そりゃ気軽には触らないよ。親しき仲にも礼儀はあるからな」

もちろん触りたい気持ちはあるが、触りすぎると単にセクハラになるので控えているだけである。それに、あまり触り過ぎたら周が自分自身を抑えられなくなる。

そんな事を知らない真昼がどこか物欲しそうに見上げるので、周はそつと苦笑をして柔らかな体を優しく抱き締め直した。



『友達の妹が俺にだけウザい』

友達の妹が真夏でもウザい

「四つある季節のうち最も厄介な季節は夏だと思うんだ」

「へー、そうなんですねー。——でもなんでいま突然そんなこと言い始めたんですか?」

真夏のある日の俺の部屋。ガラス窓一枚の防御など無駄だと言わんばかりにウザいくらいの陽光が差し込むこの場所は、エアコンをフル稼働してもまだ暑い。

常に熱を発するPCの前に座って作業しているせいもあるが、何より問題なのは——……。

「お前のウザさが百倍になるからだよ!!」

「ひどっ、なんですか唐突に人のことをウザがって! 私は何をしたっていうんですか! 私はいつもとおりにしてるだけですよっ」

「ほう、それじゃあいまお前は何をしてるんだ?」

「何ってそりゃもうセンパイの耳たぶをふにふにするお仕事ですよ。ふにふに!」

擬音を口にしながら耳たぶをいじる女の名は、小日向彩羽^{こひなたいろは}。我が家の隣に住む友達、の、妹。

事あるごとに突撃してきては縦横無尽に俺の部屋でくつろぎやがる迷惑極まりない後輩である。

確かに彩羽の言うとおり、耳たぶをふにふに程度のスキンシップは、基礎の基礎、『守破離』^{しゅはり}の『守』とも呼ぶべきごく一般的なウザ絡み。慣れ親しみすぎてウザ耐性がついた俺にはこの程度はそよ風みたいなものだ。

が、それが真夏の季節ともなると話は変わるわけで。

「暑いんだよっ。ただでさえ部屋に二人いるほうが暑いってのに、密着まですんなっ」

「はいはいツンデレ、ツンデレ。私のあしらい方としては基礎中の基礎、『守破離』の『守』ですよ、それ。もっと気合い入れて嫌がってください☆」

「なんでお前に偉そうに指導されなきゃならんのだ」

「最近ちよっと福耳になってません？ このままだとお猿さんみたいな耳になっちゃいますよ。ウキッキー！」

「だ・れ・の・せ・い・だあ——ッ！」

絡みついてくる彩羽の体を強引に引き剥がす。

「このクソ暑い中、絡むのはやめろ！ 汗かくだろ！ 汗かいてる野郎にひつつくのは、お前だって嫌だろうが」

「む。それはたしかに一理ありますね」

「わかってくれるか。よし、それじゃあもう絡むのはやめ——ぶほあっ!？」

セリフの途中で突然、顔に何かがぶっかけられた。霧状の液体噴射。爽やかな果実の香りの後で、ひんやりした感触が続いた。

「あははは！ ギャグ漫画みたいな崩壊顔おもしろすぎますって」

「おま、これなんだよ。げほっ、げほっ」

「制汗スプレーです☆」

「んなもんぶっかけんな！ 危ないだろ！」

「あ、もちろん顔に直接なんて危険なこととはしてませんよ。センプイの服にかけたらちよっと粒子が舞っちゃっただけです。コンプライアンス意識の塊と名高い小日向彩羽ちゃん、良い子が真似しないよう、放送倫理に沿った清く正しいウザ絡みを心掛けております！」

「お前なあゝ……！ よこせ！」

「きゃっ！ ちょ、センプイつてば強引に……ひゃわーっ!？」

「下手に出てりゃあさつきから調子に乗りやがって。涼めオラアッ！」

部屋の中をどたばた逃げ回る彩羽を追いかけて、制汗スプレーをぶっかける……そんな光景は、俺と彩羽の関係においては基礎中の基礎、『守破離』の『守』みたいな日常だが――。

「フッフ、私を捕らえますかー？ 運動神経抜群、夏には素早さUP補正もあるこの私を、捕まえられると思ってるんですかーっ？」

「うるせーアホ！ おとなしくお縄にかかれやーっ！」

――真夏の陽気の中だと、こうして彩羽とじゃれてるのも楽しくなっちゃって、つい付き合っちゃうんだよなあ。まったく。

自分のガキっぱさにあきれつつ、俺はさりげなくエアコンの設定温度を1℃下げるのだった。



『痴漢されそうになっている
S級美少女を助けたら隣の席の幼馴染だった』

夏といえば

「夏？ 何だろうな」

夏休み前、伏見^{ふしみ}が夏といえ^ば？ という質問を休憩時間に投げかけてきたときのことだった。

「わたしは海だね、絶対」

伏見が言^うと、聞^こえていたらしいヒメジがおほん、と咳^{せき}払い^{ばら}いをする。

「私はお祭りだと思^います」

尋^{たず}ねていないけど、話題に入^りたかつたらしい。

「まあ、定番だよな。海も祭りも」

真面目に考^えたところで正解はないん^だろう。

「スイカとか？」

「諒^{りょう}くん、小学生^みみたい」

くすつと伏見に笑^われ、もう片方の隣^りからは、「諒^{りょう}は幼稚^ちです^ね」と呆^{あき}れたような声^こが聞^こえた。

「いい^だろ、別^べに」

海も祭りも子供っぽいと思うけどな。

「それを訊いて、伏見はどうしたいわけ？ 行きたいの？」

「いやあー、なんとなく？」

誤魔化ごまかそうとしてか、伏見は目をそらす。

「私は、行きたいです。お祭り。行きませんか、諒」

「予定がなければ」

「なければ、ではなく、作らないでください。ちゃんと空けておくんです」

「わかったって。そんなに行きたいのかよ」

俺が呆れていると、聞いていた伏見が入ってきた。

「ちよつと、何こつそりと約束してるの！」

「姫奈ひなは海にでも行っていればいいんです」

「一人は嫌。みんなで行こうよ！ ね」

みんなでないいか。

「お祭りも、みんなで行こう」

伏見の提案に俺はうなずいた。ヒメジは不ふ服ふくそうだったけど。

「しーちゃん、海に行くよ。夏休み入ったら」

「え。あー……近くのじゃなければ、行こうかな」

伏見が鳥越とりごえを誘い、メンバーが固まりつつあった。これならもう撮影として行つたほうが楽だろうということになり、鳥越と相談してロケーションが海のシーンをひとつ入れることにした。

帰ってから某業まなに同じ質問をすると「エアコンの電気代」という答えが即返ってきた。

去年、消し忘れたまま外出したときに、小言を言われたことを思い出す。

うちの妹は主婦の思考回路をしているらしい。



『カノジョの妹とキスをした。』

まごのて×モーニング

寝ても覚めても暑い。いやな季節になってきた。

寝汗を吸ったパジャマが肌に張り付く不快感に目を醒ました俺は、とりあえず顔だけでも洗ってすっきりしようと布団から起き上がる。——と、

「うゝ」

キッチンにくねくね身をよじらせている時雨しぐれが居た。なんだアレ。なんかの呪いか。

「あ、おにーさん。おはようございます」

「何くねくねしてんだ？」

「それが、寝てる間に蚊かに背中を刺されたみたいで痒くって……。しかも丁度手が届きにくいところなんですよね。うーかゆいー」

そういうことか。一応キン○ヨールはしてたんだけどな。

「ねえおにーさん、孫の手ってありますか？」

「いや、言われて見れば俺も見た覚えがないな」

「ですよねえ。じゃあ兄の手でいいや。ちょっと背中を搔いてくれませんか？」

なんだそのしゃーなしの妥協みたいな言い草は。まあそのくらいやってやるけどさあ。

「背中こつち向けるよ」

「はい。よろしくお願いします」

言うとき雨は長い後ろ髪を持ち上げて肩にひっかける。あ、うなじだ。そういえば梅雨つゆの頃に時雨が体調を崩した時に見たコイツの背中……綺麗だったなあ。真つ白で、スベスベで……って、俺は朝っぱらから何を思いたしてるんだ。それとも朝だからか。やめろやめろ。

「この辺か？」

「うーん。もうちょっと上ですー」

「ほいほい」

「あーもーあと少しだけ左かなー。あーあーあー通り過ぎちゃいました。もーしっかりしてくださいよおにーさん」

注文が多いなー。

「あつ、そこ、そこいい感じです。——アツ♡ きもち……いいつ、ん！」

ちよ、なんて声出しやがるんだコイツっ！

なんか変な気分になって思わず指先を背中から放してしまふ。
するとすぐに甘えた声で時雨はおねだりしてきた。

「どーしてやめちゃうんですかあ。おにーさん、もっと、もっと強くしてくださいー」

こいつはまた人の気も知らないで。

こっちは朝起きたばかりでいろいろアレなんだぞ。辛いつてのに。
いいさ。お前がそういうならこっちだってもう容赦しねえからな！

「そこ、そこ良いですつ、あ、う~~~~~つつ！」

——数分後。

「はあ、ありがとうございます。おかげさまでスッキリしました」

「……そうかい。そりゃよかったな」

「ところでおにーさんなんで前かがみになってるんですか？」

ムラムラしたからかな。



『ただ制服を着てるだけ』

用意周到

「広巳^{ひろみ}さんってどんな水着が好きですか？」

同居生活が始まって数日経^たったある日のこと、明莉^{あかり}からだしぬけにそんな質問をされた。

「あ、着る方じゃなくて見る方ね。女の子の水着、というのが好みです？」

「水着の好み？——いや、特^{とく}にないけど」

「えー、ちゃんと考えてくださいよ」

「そう言われてもな……」

水着の種類^{うぬん}云々よりも、それを着用する女の子のプロポーションの方が大事だと思^{おも}う——
なんて言^いったら引かれそうなので、ここはお口にチャック^{けんめい}が賢明^{けんめい}。

「じゃあ、紐^{ひも}ビキニとスク水^{ひも}だったらどっちがいいです？」

「……その二択^{にたく}は極端^{きくたん}すぎないか？」

「まあまあ。参考^{さんこう}までに、ね？」

紐^{ひも}ビキニとスク水。どちらか選^えべと言^いわれたら、それはもちろん——

「……紐^{ひも}ビキニ、かな」

まかり間違^{まちが}ってもアラサーのおっさんがスク水を選^えぶわけにはいかない。ここは消去法^{しょうそはう}で

紐じきニ一択だ。

「ふむふむ、なるほど。それじゃあ……」

おもむろにスマホをいじり出す明莉。しばらくして、画面を俺に見えるよう寄越してきた。
「こういうのとか、どうです?」

通販サイトのページだろうか。豊満なスタイルのモデルさんが、もはや紐同然の際どすぎる
ビキニ姿でしなを作っている。

「広巳さんのあり? なし?」

「……………まあ、男のロマンとしては」

ありなんじゃないかと。へたに誤魔化すのも恥ずかしいので、俺は正直に答えてみせた。

「ふうん、そっかそっか」

「なんだよ……」

「別に? ——ポチッと」

——まさかこのやり取りが、後に巻き起こるあの出来事の伏線になっていようとは。
俺がそれに気付くのは、これから数日後、バスルームの中であつた。



『どうか俺を放っておいてくれ
なぜかぼっちの終わった高校生活を彼女が変えようとしてくる』

ぼっちに「夏休みにやりたいこと」とか聞かないでほしいんだが？

「なんで男子に話しかけることすらできないのよ！」

「いやだから、用事がないと話しかけづらいんだって」

五月のとある月曜日。この日も俺のぼっち脱却に向けたファミレス会議が開かれていたのだが、例によつて進捗はないし花見辻はなみつじに怒られている。だいたい、前回の高校三年間もぼっちだった奴が、タイムリープしたくらいで簡単に友達作れるわけないんだよな。

「花見辻だつて『職員室で適当な先生と雑談しろ』つて言われたら困るだろうが」

「先生とクラスメイトが同じハードルなの？」

「俺は陽キャようきゃが失つてしまった繊細せんさいな気持ちを持ち続けてるんだよ」

「相変わらず意味わからないことを……」

俺の言葉に呆れた様子でジト目を向けてきた花見辻が、ふと思ひ出したように言った。

「そういえば七村くんななむらって、前回の高校生活で夏休みは何やってたの？」

「は？ 夏休み？」

「そう。友達いないと夏休みってすごく暇じゃない？」

ほっちに「夏休みにやりたいこと」とか聞かないでほしいんだが？

何を言い出すかと思えば、もう夏休みの話か。いくら今日が五月のくせに夏の予行演習よこうえんしゅうでもしてるのかってレベルで暑いからって、さすがに気が早すぎだろ。

「暇なわけあるか。ほっちの夏休みは忙しいんだよ」

「じゃあ何してたのよ」

「そうだな。せっかくだから昼過ぎまで寝たり、夏休みの宿題やったり、本読んだり、あとは適当にアニメ見たり……」

「一人でできるやつしか挙げてないじゃない！」

「そりゃほっちだし当然だろ。これで俺が『海行ったり、バーベキューやったり、花火やったり……』とか言い出したら逆に怖くないか？ 一人でやってる図を想像してみろよ」

「それは確かに怖いけど」

花見辻がはーっとため息をつき、手元のアイステイーに口をつける。

お望み通り前回の夏休みにやってたことを言ったのに微妙な反応だ。まあ、聞く方からすれば暇そのものに聞こえるかもしれないが、これで意外と充実してるんだよ。

そもそも、学校に行つてほっちの疎外感そがいかんを味わわなくていいという点でメリットしかない。

夏休み最高！

「うーん、じゃあ友達がきたら何がしたい？」

今度はそんなことを聞いてきた。

友達ができたら、か……ぼっちには難しい質問だ。

「コンビニでアイスを買ってきてもらったり、夏休みの宿題を見せてもらったり……あとはそうだな、俺の代わりに店舗特典があるショップでラノベを買ってきてもらう」

「友達を便利屋だと思っていない発言が次々と……」

花見辻は額に手を当てて呟いた。なんだか言葉のニュアンスに苛立ちを感じるし、さすがにちよつとふざけすぎたかもしれない。

でもこういう質問って、本気で答えるのも相当恥ずかしいだろ。俺みたいなぼっちが言ったらそれこそ切なる願いの霧囲気が出ちゃいそうだし。俺は本当に、別にぼっちでいいと思ってるんだけどな……。

「仕方ねえだろ、もはや友達作ったら逆に負けって感じすらあるし。ぼっちが俺のアイデンティティと化してるというか」

「そんなアイデンティティはさっさと捨てなさいよ！」

「ふとした時に思うんだよ。友達がいる俺とか、それは本当に俺なのか……？」

「そんなので揺らぐアイデンティティはやっぱり捨てていいわよ」

やはり俺に向けられた目は冷たいままで、口調もつれない。それなのに、花見辻と過ごすこの時間のことが、俺はそれなりに好ましいと思っている。

もしかすると、友達と過ごすってのはこんな感じなのかな。ぼっちだから知らんけど。